

今年も又、桜の季節が巡ってきた。

桜は、気品に満ちた姿を、あそこでも、ここでも、見せてくれているのだが。

桜は、そこにあるのに、花見どころではない。と、どうか自粛ムードだ。

テレビも新聞も、新型コロナウイルスの感染拡大の報道ばかり。世界の感染者数・死者数や、国内で確認された、感染者数と死者数、おまけに、国内は、都道府県別にも毎日発表されている。

二〇一九年末には、

「中国・武漢で特殊な肺炎が発生し、患者が、隔離治療を受けている」との情報が、WHOに伝えられたが、中国側の専門家が、公式にヒトからヒトへの感染を認めたのは、二〇二〇年の一月二十日だと新聞に載っていた。

二月に入ると、薬局から徐々にマスクが消えていった。

ガーゼのハンカチで、マスクを手縫いしたもの、不細工過ぎて、つけるのをためらってしまう。が、つけないで、うっかり食材を買いに出かけようものなら、まるで非国民とも言いたげな目で、睨まれる。

四月七日には、七都府県に「緊急事態宣言」が出されたが、十七日には、全国が「新型コロナウイルスに関する緊急事態宣言」の対象になった。

それなりに楽しみにしていた東京オリンピックも、来年の七月二十三日からに延期になり、入学式や、卒業式や、入社式は、中止になったり、特定の限られた人だけで、時間を短くして行ったり「普通」や「日常」が、存在をなくそうとしている。

学校が休みになった為、働けなくなった母親達も、子供達も、どことなくいらいらして、体が尖っている。

会社員達も、自営の人達も、そうでない人達も、いつ終わるとも知れないコロナの前では、気持ちを正常に保とうと必死だ。その自覚は無いかも知れないが、いつ迄、正常でいられるだろうか。

——コンビニに、食パンと牛乳と卵を買いに出かけた。お母さん食堂の前に立ち寄り、いつも品切れしている「海鮮スティック博多明太マヨネーズ」が大量にあったので、二本も買ってしまった。

自宅に戻る途中、小さな公園の中を横切っていると、桜の花達が、私を呼んでいる気がした。

「そうだ、海鮮スティック二本買ったのだから、一本だけ桜を見ながら食べよう」
桜の花びらが、踊っているように散っている。

「正常」から、はずれようとしているのかもしれない。

「ここで食べよう。コロナをいつ時忘れよう。憂さ晴らしだ」と、訳の分からない独り言を言いつつ、桜の近くにあるベンチに腰をおろした。

何と見事な散り姿なんだろう。

青い空に、淡いピンクの花びらがハラハラと舞っている。花びらを目で追っていると、体が暖かくなってきた。まるで、電気カーペットの上にいるように、ベンチは、ふかふかだった。

体が、どんどん軽くなっていく……。

「ねえー、やはり正常じゃないのかもしれない……」

ねえーとは、誰に話しかけているのだろう。

「さくら、さくら、やよいのそらはみわたすかぎり……」

幼い子供の歌声が、どこか遠くから聞こえてきた気がした。

ふと、三十六年前の桜の季節の一日が見えてきた――。

(どんな顔をするだろう、きつとびつくりするだろうな)

期待に胸を膨らませ、三百十一号室の部屋を確かめた。

――南野俊みなみのしゅん――弟の名前があった。

ドアをノックして、

「はい」と女の人の声を聞いてから、静かにあけた。三つ並んだベッドの一番奥には、初老の男性と付き添いの女性の姿があった。

「こんにちは」

小さく言ってみた。

「こんにちは」

こちらを振り向いて、女性はにこやかにゆつくり頭を下げた。

「南野の姉です。いつも弟がお世話になっていいることと思います」

「えっ、じゃ長崎から？」

「そんなこと迄、お話ししているんですね」

「じゃ、早くお会いになりたいでしょう。そういえば、南野さん、屋上に行くっておっしゃっていましたよ」

その人は、せき立てるように、一緒に廊下に出た。

「あそこの階段を上がった所が、屋上ですから」

エレベーターの隣の階段を、指で教えてくれた。

「どうもありがとうございます」

見知らぬ土地で弟を見舞う緊張が、一人のこやかな女性によって、急にほぐれた。

(屋上に何しに行ったんだろう。洗濯なら、育子さんがしてくれている筈なのに)

屋上のドアは、開いたままになっており、そこには、洗濯物を干している白い割烹着が目に入った。

奥の方に、小柄な姿があった。近く迄行って、俊だと確信してから声をかけた。

「シユン！」

俊は、裸足のままふり向いた。

「姉さん、どうしたの？」

「俊のお見舞いたいね。さつき着いたとよ」

「大したこと無いし、もうすぐ退院だから来なくていいよって言ってあったのに」

「お母さんがね、節句には少し早かけど、チマキば、俊と遥に食べさせてやりたかって。

姉ちゃんも、あんたの顔ば見たかったし」

「そうか、ありがとう。それにしても、長旅で疲れただろう」

「えっ、二時間のどこが長旅ね」

「飛行機で来たの？」

「オフコース！」

得意気に答えた。

「怖くなかったか？」

「いいえ全然。と言えば嘘になるごたっね」

「そうだろう？ 僕はしばらくイヤだな、飛行機は怖いよ」

「俊って、案外気の小さかとね」

「まあ、何とでも言ってくれ」

投げやりに言い放った。

自衛隊に入ってから、俊は父の墓参りに年に一回は帰省した。が、会う度に頬がやせこけて、三十才になったばかりだというのに、白髪混じりの頭といい、四十才位に見えて、姉としては、哀しいものがあった。

目の前の俊は、一段と老けて見えた。

「でも、元氣そうで良かった」

「当たり前だろ。いい若いもんが、昼間からベッドの上なんて情けないよ」

「……屋上に素足で、何ばしよったと？」

「健康の為に足の裏を鍛えているだけだよ」

屋上から一緒に病室に戻る時、俊の後ろを黙って歩いた。後ろ姿は、年令相応なので安心した。

昨年は北海道の部隊にいたから、今度の入院も北海道でだったら、旅費も嵩むし、会いに来れなかったかもしれないとチラツと思った。

「貧乏は好かんねー」

つぶやくように言った。

「姉さん、何か言った？」

標準語で喋る俊に、

「えっ、何か聞こえましたか？」

よそいき言葉で聞き返すと、彼は優しい笑みを浮かべた。笑った顔は、幼い頃のままだった。

病室に戻ると、先程の女性が笑顔で迎えてくれた。

「南野さん、良かったですね」

「はい……」

「ご親切にありがとうございました」

頭を下げてから、大きなバッグをあけた。

「これ、チマキ。男の子の節句には一ヶ月程早かけど、俊と遙に食べさせたかって、お母さんの作らしたけん」

「ウワー、久しぶりだな。母さんのチマキ」

言うなり、俊はチマキの皮をむき始めた。

「おひとつ、如何ですか？ 母が作った物ですからお口に合うか、わかりませんが」

奥の女性にすすめた。

「まあ、珍しい物を。ありがとうございます。じゃ、一つだけ頂戴します」

二つ差し出すと、その人は、一つだけ両方の手で受けた。

母が竹の皮でこさえたチマキを、俊と二人でほおばった。三角錐に似たこのチマキは、形を整えるのが難しくて、何回か挑戦してみたが、こんなにバランス良くできなかつた。塩加減が何とも言えない。

「これが、お袋の味って言うんだらうな」

口の中がチマキで一杯だったので、大きく頷いて返事をした。

「私達はちよつと散歩に出て来ます。お姉様、どうぞごゆっくり」

「どうもありがとうございます」

奥の夫婦連れが、ドアをあけながら挨拶してくれた。男の人は、女の人の肩に手を置い

て足を引きずるようにして出て行った。

「ところで、育子さんと遙くん、いつ来らす？」

「いつも夕方だな。あつ、今日は来ないよ、千葉に行くって言っていたから」

私は、内心ホッとした。遙は、血の繋がった甥だから会いたい気もしたが、義妹の育子には、強いて会いたくもなかった。

千葉には、育子の実家があった。今度の入院にしたって、

「心配いりません、大丈夫です」だけで、詳しい経過報告をしてくれない義妹に、反感を覚えていた。何の力もない夫の実家を、心の中で笑っているに違いないのだ。

「今夜、うちに泊まれるんだろう？」

「俊の元気か顔ば見たけん、もう良か。今日、帰る。今、みかんの木の手入れで、忙しかけんね」

「そうか……」

「それに、一回寝台車に乗ってみたかよ」

「うん、そうだな、寝台車も情緒があつていいもんな。そしたら、さくら、だな」

俊は、単純に理解してくれた。本心は、あまり快く思っていない育子と遙しかいない家には、泊まりたくなかったのだ。

「だけど、あとで育子に電話してみるよ。姉さんが来ているってこと」

「うん、宜しく言っといてくれんね」

「それより、姉さん、早く嫁に行かなきゃ駄目だよ。母さんが心配していたよ」

「えっ、いつそがん話したと？」

確かに、一ヶ月程前に見合いはしたが、俊の耳にまで入っていたなんて、知らなかった。

「母さんが、良い話しだから、お前からも勧めてくれてさ。そうこうしている間に入院してしまったもんだから。僕のせいで、姉さんが独身を通しているみたいで嫌なんだよな、正直なところ」

「はいはい、分かりました。でも、言っときますけど、姉ちゃんは、決して独身ば通しているわけじゃなかとよ。姉ちゃんの気にいる人が、現れなかっただけです」

「ああ、そうでしたか！」

俊は、語気を強めてペロツと舌を出した。

私が六才、俊が三才の時、父が病死。それからの母は、まさに女を捨て土にまみれた。

「先祖様の汗の染み込んだ、土地ば荒らせばバチのあたる」と、毎朝の般若心経と同じ位何度も聞かされた。

そして、俊に対しては、小学校に上がらない内から、

「うちは貧乏やつけん、普通の大学にはやりきらん。俊は、よう勉強して防衛大学に入らんばぞ」と、毎夜の子守唄と同じ位言っけて聞かせた。

「防衛大学」という言葉を、優しく諭すように聞かされて育った彼は、いつしかその気になっけていった気がする。

——あれは、私が小学四年生、俊が一年生の秋だった。市場に売る為に銀杏を二人で拾っている、近所のおばさんがやって来た。おばさんも並んで銀杏を拾い始めた。

「俊くんは、よう勉強のできらすとっけてね」

「はい、防衛大学に行きます」

俊は、急に立ち上がって、きをつけをした。おばさんは、心底感心したように言った。

「ほうー、俊くんは親孝行ねー」

俊は、喜んでいた。

私は、何故か恥ずかしくてうつつむいてしまった。でも、おばさんが、被っていた手ぬぐいを取って、暫く目を覆っていたことは、ハッキリと見た。

俊が高校生になって、そこを卒業したら、自衛隊に入る義務があるのを知っているかと問いただしても、覚悟していると行って聞かなかった。

私は、彼の小柄な体格と、要領の悪い性格が、自衛隊には向かないのではないかと、心配で仕方なかった。

「検温ですよ」

チマキで喉が渴いたので、お茶でも入れようとしていると、看護師が入って来た。

「すみません、どんな具合なんでしょうか？ 退院は、いつ頃になりますか？」

続けざまに質問した。

「失礼ですが、どういうご関係の方ですか？」

義務的に言った。

「あっ、姉です。いつもお世話かけてすみません」

「本日は、南野さんの主治医が当番ですので、聞いてまいります。しばらくお待ち下さい」奥の男性の検温が終わると、看護師は出て行った。と、同時に、

「育子に電話したら、是非会いたいって言っていたから、もしかしたら、来るかもしれないよ。でも、帰る迄に間に合うかな？」

「あれっ、いつ電話しに行ったと？」

「さっき、トイレに行った時だよ」

「フーン……」

たいして会いたい相手でもないのに、俊が不愉快に感じない程度に反応した。

——ドアをノックする音がした。半開きのドアを見ると、先程の看護師が、廊下へ出るよう促した。

「主治医が、直接お話ししたいと申していますので」

「はい、どうもありがとうございます」

「どうぞ、こちらです」

下に行く階段を、手のひらで案内した。

「俊、姉ちゃんは先生にご挨拶に行つて来るね」

俊に声をかけると、階段を下りてついて行つた。二階にナースセンターがあった。

その横にあるドアを、看護師はノックした。

「南野様のお姉様です」

「どうぞ、お通しして」

太い声が出た。

看護師は、私を中に通すと出て行つた。

「先生、この度は、弟が大変お世話になりました、ありがとうございます」

私は、深く頭を下げた。

「いえいえ、まっ、おかけ下さい」

太り気味のその医者は、椅子を勧めた。

「微熱も取れたようですし、一週間もすれば退院できますよ」

一言一言、ていねいな物言いに、一気に好感度が上がった。

「あのー、弟の嫁からは、風邪をこじらせただけだと聞いたのですが。風邪だけで、二週間も入院するだろうか、心配になってきました」

母は「いい若い者が、風邪で二週間も入院するなんて変だ」と、言い張るし、二人とも心配で寝つけない夜が続いた。

「実は吐血されましたね」

「えー、血を吐いたんですか？」

「そんなに、びっくりされなくても宜しいですよ、よくあることです。弟さんの場合も、単なる胃潰瘍でした。奥様が風邪だとおっしゃったのは、ご心配かけたくなかったからだと思いますよ」

「……」

「たまたまご自宅にお帰りの途中、深夜にこの病院の近くの道路で、倒れておられて。通りがかった人が、救急車を呼んで下さって」

「……」

「その時も、僕が当直だったんです」

「……どうして、そんな病気に？」

「殆どストレスからきますね。奥様からお聞きしましても、昨年の日航機墜落事故以来、現場に入られて」

「弟も現場に行っていたんですか？」

「医者は大きく頷いた。」

「全然知りませんでした……」

あの日本中を騒がせた大事故に、弟もかかわっていたなんて、何も知らなかった自分が、少し寂しかった。

「死臭の立ち込める中での作業の上、睡眠も充分に取れなかったようです。寝返りも打てない山の中ですね。真夏でしたから、体力の消耗は激しかった筈です」

「……」

「あれから約半年、今頃になって具体的に出てくるんですね」

「……」

私は、医者の火が出てくるのではないかと思う位の、熱い目を見ながら、黙って聞いていた。

「ついでに言わせてもらえば、弟さんのストレスの原因は、マスコミも大きいと思いますよ。新聞も雑誌も、救出が遅すぎた・最初から生存者はいないと決め込んだ・高い税金を使っているのに、肝心な時に役に立たない等、勝手なことを書かれて、現場で作業を続けている人間はたまりませんよ」

弟とは無縁の事故だと思いついでいた。が、よく考えてみると、自衛隊にいるのに、無縁の事故だと思おう方がおかしかったのだ。

「入院されてしばらくは、心身共に衰弱がひどくて、正直、こんなに早くお元気になられるとは思ってもみませんでした。……実は、私の妹もあの事故で亡くなりましてね……」

「……そうでしたか……」

私は、返す言葉がみつからなかった。

「せめて事故現場に、大好きだった水羊かんとお花でも、と思って登ったのですが、五時間かかりました。道のない山を登るのですから、一時間もすると、豆はできるし顔も手も傷だらけ。最初に登ったのは、九月に入ってからだったので、事故から二十日経っていたんですよ。それでも、遺体や遺品の収容をもくもくやっておられました。有り難くて、思わず手を合わせました」

「……」

「確かに遺族にしたらたまりません。妻とも仲の良い妹でしたから、毎晩二人で泣きました。せめてもの慰めは、婚約者と一緒だったことですかね。でも、自衛隊を責めるなんて、

筋違いも甚だしいと思いませんか?」

「……」

私は、ただ無言で頷いた。

「現場に行ったことも無いのに、自衛隊のことを悪く言うマスコミがあまりにも多くて、たまらなく腹がたちます。……大人気ないなあ、とは思うのですが」

日航機墜落事故のことを、そこ迄深く考えたことはなかったもので、返答の仕様がなかった。ただ、黙って聞いていた。

「あの事故が原因で、体と精神が病気になるた隊員も多いんですよ。……過労とストレスが、引き金になっている場合が多いですね」

私は、俊がそんなに打撃を受けていたなんて、考えもしなかった。

育子も、自衛隊員の妻として、辛い立場に立たされたに違いない。それなのに、まめに電話をくれる育子からは、一言の愚痴も聞いたことは無かった。

上品な育子の顔が、チラッと浮かんだ。

「余計な話しをしてしまって、すみませんでした」

「いいえ、こちらこそ。弟の職場をそこまで理解して頂いて、有り難いことです」

私は下げた頭を上げることができなかった。

「とにかく、ご病気のことは、もう何も心配いりませんので、ご安心下さい」

「お忙しいのに、お時間を作っていただきまして、ありがとうございます。今後とも宜しくお願い致します」

私は、も一度深く頭を下げた。

千綿の家を出る時の不安な気持ちだが、いっぺんに吹き飛んだ。こんなにも、弟達のことを、真剣に考えてくれている他人がいることに、理屈抜きに感激した。

「本当にどうもありがとうございます」

ドアの閉まる音を聞きながら、来て良かったと、しみじみと思った。

ナースセンターを過ぎて、三階の病室に戻ろうと二階の階段を上り始めた。と、窓から中庭が見える。身を乗り出して、下を覗いた。

二十坪程の庭に、桜の木のでっぺんが見えた。花びらが、びっしり詰まっている。存在感のある桜なのに、今、初めて気がついた。よく見ると、庭には、あちこちにつつじも咲いていた。赤と白とピンクと。実家にもある平戸つつじだ。

平戸つつじを見ながら、お見合いの相手のことを考えていた。

その人は、今の季節、レンゲ草が好きだと言っていた。

今の季節、千綿の段々畑は、ピンクのレンゲ草と、菜の花の黄色。青い大村湾に沿って、

オレンジのディーゼル機関車が走り出したら、絵にも描けない美しさになる。

今朝も、千綿駅に向かうと、小さな駅舎に桜の花びらが散り始めていた。

お見合いのその人は、一つ年下の三十二才で役場に勤めていた。三男というのが、私には好ましかった。例えば母と同居しなくても、相手の親にそれほど気兼ねせず、親子の交流ができると思ったからだ。

友達の話しを聞いていると、情熱的な恋をして結婚しても、お見合いで何となく結婚しても、結婚生活そのものは、たいして変りのないものに思えた。

それよりも、相手の親と同居か否か、小姑の干渉度はどの程度か、給料はきちんと家に入れてくれるか、酒癖は悪くないか、というような日常的事が、結婚生活をスムーズにさせる鍵に思えた。

その相手の両親はと言うと、母が、二人の子供を女手一つで大きくしたことを、こちらが恥ずかしくなる位に誉めたたえた。結婚した暁には、母と同居してはどうかとも言ってくれている。願ってもない話だった。

あまりにもうま過ぎる話で怖い位だが、乗ってみようかなという気持ちになっている。

「嫁にやった娘と同居するごたつこと、考えたこともなか」

母は、そう言いながらも嬉しそうだった。

「人間万事塞翁が馬たいね」

ふっと、複雑な表情で呟く。

(二時か、俊が心配しているだろうな)

三階に上がろうとしたが、帰りの切符のことが気になった。又、二階に戻って、ナースセンターで時刻表を貸してもらった。

——病室に戻ると、俊は、ベッドの上で雑誌を広げていた。

「姉さん、遅いじゃないか。一体どうしたの？」

「うん、庭ば覗いたら、桜とつつじのあんまりきれかったけん、見とれとつたと」

「そうだろう、きれいだよな」

「うん……」

「うちの子供も、ここに来たらあの中庭で遊んでいるよ。……僕も何年ぶりかなあ、のんびりと花なんか眺めるの」

「自衛隊って、そがんきつかとこね、痩せてしもうて。日航機の墜落現場にも行ったとつてね？」

「……」

「姉ちゃん達は、全然知らんやつたけん、どこの部隊やろうねって、お母さんと言いよつ

たとよ。……何で教えてくれんやったと？ 水臭か！」

いつの間にか、きつい口調になっていた。

「そんなこと言って、どうなるものでもないだろ。心配させるだけじゃないか。あの時は、育子にも連絡できなかったんだよ」

「育子、育子って、お母さんや姉ちゃんより、育子さんがそがん大事かとね！」

私の小姑根性が、頭を持ち上げてきた。と、俊の表情が一瞬で険しくなった。

「一体、姉さんは何が言いたいんだ。僕が出張で家をあけるって言ったら、一ヶ月位ざらだよ。日航機の時だってそうだった。それでも育子は、文句一つ言わず、小さな子供を抱えて、留守を守ってくれているんだ」

「実家も近かし不便なこと無かやる。姑の目も届かんけん、いつも実家に帰れて結構たいね！」

言い過ぎた、と思ったが、遅かった。

「何が結構なものか、そんなに実家に帰れるわけないだろ！」

「じゃ、今日は何で？」

結局は、このことが引っかけかかっていたのだった。夫が入院しているのに、のこのこと実家に帰っているということが。

「義妹に赤ちゃんができたから、今日はお祝いに行っているんだよ」

「……」

「義妹夫婦が両親と暮らしているから、お互いに独身の時のようにはいかないさ」

一言、一言に魂を込めた物言いに、次の言葉が出なかった。

体こそ入隊して痩せ細ったが、たくましく成長した俊に脱帽した。

しばらく何も言えなかった……。

テレビの画面に目をやったまま、

「姉さんも、今度こそ結婚しろよ」と、俊が言った。

それは、もとの穏やかな物言いだった。

「そしたら、俊も安心かね？」

「勿論だよ。僕が先に結婚してしまった為に、姉さんの結婚が遅くなっているかも知れないわけだから、責任感じていないこともないし」

「……」

「それを思ったら、夜も眠れません！」

わざとらしく、言い放った。

「何ば言いよつとね、姉ちゃんをその気にさせてくれる人が、現れんかっただけだね。」

俊の為に犠牲になる気持ちは、これぼっちもありません。好きな人が現れたら、さっさと

結婚しますので悪しからず！」

「一日も早く、その日がくるのを待っているよ。結婚したら、姉さんのトゲトゲも少しはましになると思うから」

皮肉たっぷりに笑った。

「……トゲトゲ？」

「そう、トゲトゲ！ 一人よがりの頭の硬い人を、トゲトゲ人間って言うんだよ」

「それにしても、育子さんの妹さんが、ご両親と同居しとらすって、初耳やったよ」

「そうだな、僕も言い始め、アハハ……」

俊は、又軽やかに笑った。

「僕は、母さんに苦勞して育ててもらった恩があるし、そのことは育子も理解してくれているから、心配しないで」

「……」

「何てたつて長男って事忘れていないよ」

「私も長女という立場、忘れていませんのでご安心下さい」

何だか気持ち軽やかになった。

二人して、顔を見合せて笑った。

「さあさ、俊の元気な顔ば見たけん、もう用事はなか。さっさと帰らせて頂きます！」

「はい、はい」

——時刻表を俊に見てもらって、四時四十分発の『さくら』で帰ることになった。

慣れない土地だからと思って、早めに病院を出たのはいいが、〇〇駅に三時に着いてしまった。着いてすぐに、佐世保迄の『さくら』の切符も買った。

〇〇駅から、快速で東京駅迄二十分。

切符と土産を買って、『さくら』の発車時間の三十分前に、東京駅に到着するにしても、まだ一時間程余裕がある。

辺りを見渡すと、改札口の向いに喫茶店があったので、入ることにした。改札口を見渡せる席に座った。

コーヒーを飲みながら、ポケーと行き交う人達を眺めることにした。

土産は、栗饅頭を八箱買った。六箱は、近所の人達に、一箱は濃い岡田さんのお茶を入れて、母と食べようと思っている。もう一箱は、気持ちが固まりつつある、見合いの相手に渡すつもりでいた。

俊に会ったことで、結婚に対する気持ちが前向きになった気がする。俊の病気の心配も取れ、育子に対しても、数時間前迄抱いていたわだかまりが消え、逆に、愛しい気持ちに

さえなっている。

先ほど買ったばかりの切符を取り出した。

「さくら、九号車、三番A」

口に出して呟いてみる。

「さくら、か……」

今、さくらの花びらのように、しなやかな気分になっている自分に気がついた。いい顔の自分を意識した。コーヒーを注文する時も、ささやくようにやさしく言った。

「さくら」で一晩過して、目が覚めると、何かいいことが待っている予感がした。

——コーヒーをすすりながら、外を眺めて三十分も経っただろうか。改札口の方を見ると、小さな子供が目に入った。お母さんらしき人に手を取られ、改札の列に上手に並んでいる。不思議な親しみを感じて凝視していると、その子がこちらを向いた。育子が月に一度送ってくれる写真と、同じ顔だった。

「ハ・ル……」

名前を呼びながら、身体は出口迄出ていた。

「ちよつと、ちよつとお客さん！」

ウェイターが、冷たく叫んだ。その場を離れるわけにもいかず、

「遥くん」

周りの人達が、振り向くほどの大声を上げていた。

育子が気付いて、手を振りながら駆けてきた。

「いやー、お姉さん、間に合って良かった」

彼女は、少しハァーハァー言っている。

「何だか血が騒ぐと思ったら、やっぱり遥くんだったね」

遥は、変なおばさんとも言いだけに、私の顔を見上げている。

「遥、長崎のおばちゃまよ。ごあいさつは？」

「うん、こんにちは……」

「こんにちは！」

彼は、神妙な顔になった。

それにしても、親子って不思議だ。ちよつとはにかんだ返事の仕方が、幼い頃の俊にあまりにもそっくりなので、なつかしくて、言葉をなくしてしまいそうだった。

喫茶店の勘定を済ませると、育子が荷物を持ってくれた。遥も持ちたそうなので、一番軽いのを持ってもらった。

「発車時間は俊さんに聞いたので、ホームで待っていたら、会えるかもしれないって思っ
て。間に合って良かった……」

育子は、ハァーハァー言いながら、東京駅迄の切符を見せてくれた。

三人の体は、自然と〇〇駅の改札口の列に並んだ。

「お姉さん、すみませんね。わざわざ来て下さったのに、何のお構いもできませんで」

「いいえ、こちらこそ。もっと早く来たかったのに、遅くなってしまって……」

「お母さんも、お変りないですか？」

「はい、お陰様で」

「でも、お会いできて本当に良かった。病院に着いたら、十分程前に出られたって聞いて、もう、お会いできないかもしれないと思っていました」

嬉しそうに語る育子の顔には、張りが無かった。何年か前の、手入れの行き届いたきれいな育子は、どこにいつてしまったのだろう。

初めて俊から育子を紹介された時のことは、今でもよく覚えている。

いかにも育ちの良さそうなお嬢様に、嫌悪感を覚えた。身長は百六十センチ位、奥二重の大きな目、笑うと、唇の横にある黒子が、とても色っぽくて、苦勞を知らない笑顔が素敵だった。

自分の境遇とあまりにも違い過ぎる。知らない種類の笑顔に対する、拒否反応だったのだろう。その時は、ただ単に、弟を取られた嫉妬心のせいだと思って、心の狭い自分に嫌気がさした。

——〇〇駅から東京駅に向かう在来線では三人共座れたので良かった。遥が何か外の景色を見ながら、

「あつ、さくらだ！」

「あつ、カラスだ！」

「あつ、消防車だ！」

と発する度に、育子は、その都度私と遥の顔を見て頷く。

「遥くんは、何才？」

四本の指をたてて、私に見せながら、

「あつ、パトカーだ！」

と、叫んだ。

（育子は、俊と結婚して、本当に幸せだったのだろうか？……）

育子と遥と同じ様に、外の景色を眺めながら、そう思っている自分が不思議だった。

ホームに着くと、すでに「さくら」は停車しており、乗車しても良い旨、アナウンスが流れていた。

「これ、長崎行きと佐世保行きに離れるんでしょう？ 途中で。俊さんが、くれぐれも注

意するようになって」

「分かりました、ありがとうございます」

「……」

「私のは九号車だから……」

今度は、遙に合わせて、九号車を目指して歩いた。

「遙も、発車する迄、電車に乗って、長崎のおばちゃんとお話ししましょうね」

「ママ、これ電車じゃないよ。ブルートレインって言うんだよ」

すかさず、遙は答えた。

「遙くんはよく知っているね。本当におりこうさん」

私は、立ち止まって遙の頭を撫でた。

「遙くんは、電車が、あつ違う。ブルートレインが好きなの？」

「うん！」

得意げに答えた。

「あつ、これこれ。九号車、佐世保行き」

育子が先に行って確かめてくれた。

「遙、はい、ブルートレインに乗るわよ」

「ワァーイ、ほく初めて！」

「遙くんも、これに乗って長崎のおばちゃんの家に来てね。パパやママと一緒に」

「うん！」

寝台は、まだセットされていなかったので、ゆっくり座れた。

育子と私は並んで座った。

他の乗客がいないのをいいことに、遙は、喜々として狭い通路を動き回っている。

初めてのブルートレインの車内は、寝台はセットされていないとは言え、片側に小さい階段があったり、普通の電車とはかなり雰囲気が違うので、四才の電車好きの男の子には楽しいに違いない。

遙をずつと目で追いかけているが、

「お姉さんのお陰で、ブルートレインに乗れて、遙、大満足ですよ」

育子は嬉しそうに言った。

「私も嬉しいです。それにしても、遙くん、大きくなりましたね」

「本当に、子供って知らない間に大きくなりますね……」

「……」

「……」

二人で遙の動きを楽しみながら、時々、微笑み合った。

「……」

「……」

会話がなくても、良い空気が流れている。嬉しい瞬間だった。

「……育子さん」

「はい」

「……育子さん、俊や遙くんのこと、宜しく願いしますね」

「はい」

「何も応援できなくて、すまないと思っています」

「それは私の方です、お姉さん」

二人の目は、遙の姿にあった。

「いくこさん」

何となくシンミリした空気が恥ずかしくて、思い切り明るく言った。

「育子さん、あまり無理しないようにね。何ってたってお母さんなんだから」

「はい、ありがとうございます。でも、お母さんやお姉さんこそ……」

「長崎は大丈夫よ、私がついているから。育子さんこそ、看病疲れしないよう気を付けてね」

「……」

育子は、黙って頷いた。

ベルの音が鳴り響いた。

『十六時四十分発、さくら、五分程で発車します。お見送りの方は、ホームに降りて下さい』

まもなく、発車を知らせるアナウンスが流れた。

育子と私は、どちらからともなく手を差し出し、握手した。二人の間に言葉はいらなかった。

「遙くん、ママの言うことよく聞いてね」

「うん」

「お正月は長崎にいらっしやいね」

「はい」

遙の頭をなでながら、一緒に乗車口に向かった。

育子達が降りると間もなく、発車のベルが鳴り響いた。

ドアが閉まった。

遙は、無邪気にバイバイを繰り返している。

育子は、黙って微笑んでいる。

私も、今まで生きてきた中で、一番の笑顔とバイバイを送った。

「さくら」は動き出した。

「さよなら」

「きをつけて」

育子の口が言った。

遙は、バイバイを大きく繰り返した。

——時計は、十八時になろうとしていた。

係の人が寝台もセットしてくれた。私のベッドは、下の寝台だったので、そのまま座っていた。

外の景色も、薄暗くなりかけてきたので、下段の寝台のカーテンを閉めた。

私は、母が持たせてくれた、小さな水筒を取り出した。そこには、イチゴ酒が入っている。母と二人で作ったイチゴを、焼酎に漬け込んだものだ。

そのまま持ち帰ろうと思っていたのだが、飲みたい気分になってしまった。

この幸せな感覚は、一体何ものか。

育子と、遙と、本当の家族になったような、そんな気がする。育子との間に、言葉がない時間があった。ああいう空気は、他人との間で、そんなに存在しないのではないか。

今の私の願いは、ただひとつ。

それは、

(俊と結婚して良かった)と、心から育子に思ってもらうこと。

思わず、イチゴ酒を、ごくりごくりと二度飲み込んだ。

四人ベッドなのに、自分だけしかないことをいいことに、一合入っていた水筒の中身は、しばらくすると無くなってしまった。

酔いを意識すると、ベッドに深く腰掛け、腕組みをした。このまま、横になってもいいのだ、ブルートレインだから。

まるで小父さんだなと笑いながら、腹に巻きつけたストッキングを確認した。そこには切符や財布が入っている。

「よし、カンペキ」

大きなひとりごとだった。

いつの間にか、私は千綿ちわた駅にいた。

駅舎の横にある、桜の木の枝に座っている。

桜の花に囲まれて、駅舎は見えない位だ。

「うふふ、うふふ……」

可愛い笑い声が。

「うふふ、ウフフ……」
四方から、聞こえる。

さくらの花びら達の鬼ごっこ。

花びら達には、目と口がついている。

鬼ごっこに負けたら、

地面に落ちていくしかない。

大村湾の海岸ぎりぎりに線路が。

それは、曲がりくねって続く。

大村湾の風は静かで、

釣り船が点々と浮かぶ。

線路に沿って国道が走る。

国道の向こうには、段々畑。

段々畑の黄色とピンクは、

菜の花とレンゲ草。

千綿駅の駅舎には、

オレンジのディーゼル機関車が。

機関車も、

さくらの花びら達に埋め尽くされている。

大村湾のブルーにも、

さくらの花びら達が。

それを、満足げに眺めている私。

私の背中には羽が。

鬼ごっこをしている花びら達にも羽が。

うふふ、うふふ……羽を貰って良かったね。

うふふ、うふふ……自由に遊ぼう。

うふふ、うふふ……いっぱい遊ぼう。

たちまち、花びらで埋め尽くされた。

花びら達は、狂ったように踊りだした。

うふふ、うふふ……。

もう、何も見えなくなった。

ピンクの世界に歌声が聞こえてきた

……さくら、さくら、やよいのそらは、みわたすかぎり……

幼い男の子の声だった。

その声は、幼い頃の俊のようでもあり、遥のようでもあった。
……さくら、さくら、やよいのそらは、みわたすかぎり……

「ねえー、前と同じ日常は、いつ、戻ってくるのかな？……」
……さくら、さくら、やよいのそらは、みわたすかぎり……

歌声を遠くに聞きながら、コロナの現実に戻るしかないことに、笑えてきた。